

## 荒木恵作「命の朝に」

< 前編 >

川村まことの母 まこと、早く起きなさい。遅刻するわよ。

川村まこと うっそー。もうこんな時間？ 何でもっと早く起こしてくれなかったのよ。

まことの弟 毎日毎日、同じこと言ってんじゃん。

まこと うるさ～い!!

母 ほら、ケンカなんかしてないで。まこと、薬持ったの？

まこと 持ったよ、ほら。じゃあ行ってきます。

母 まこと、ご飯は？

まこと 要らない。

(効果音) (ボタンとドアを閉める音)

ナレーション 慌ただしく家を出たのは、わたし、川村まこと。青春中学3年生。わたしの家は、ノンビリ屋の父と、口うるさい母、そして生意気な弟の4人家族。朝から寝坊するなんて、今日はツイてない。

まこと(モノローグ) 早く行かないと遅刻しちゃう。

ナレーション そう思いながら、病院の前を通り過ぎようとした時だった。わたしの目の前に、上から白い物が落ちてきた。

(効果音) (バサリと落ちる音。)

まこと 何これ？

ナレーション それは小さな本だった。表紙には、男の人が十字架につけられている絵がかかっている。

まこと(モノローグ) 子供...聖書物語？

星野ルミ すみませーん。本落としちゃってー。

ナレーション 上を見上げると、5階の病室から小さな女の子が顔をのぞかせている。

ルミ その本、看護婦さんに渡してもらえますかぁ。

まこと あ、分かった。いいわよー。

ナレーション わたしは、ちょうど出てきた看護婦さんにその本を渡すと、学校へと全力で走った。

浩司 よぉ、間に合ったか。

桃子 遅刻寸前よ。

健二 ぎりぎりじゃん。

ナレーション そう言って迎えたのは、仲良しの3人、浩司、健二と桃子。彼らとは小学校からの付き合いだった。

まこと (はぁはぁ息を切らしながら) ああ苦しい。朝から激しい運動とはキツイよぉ。

健二 そうだよ川村。自分の体をいたわってあげなくちゃ。普通の体じゃないんだから。

浩司 でも不思議だよな。いつも元気なこいつが心臓病だなんて。本当はウソなんじゃないか？

まこと あ、そんなこと言っていいわけ？ わたしはちゃんとした病人よ。

健二 そんなこと、威張んなよ。

ナレーション わたしは、体の話になると、なぜかムキになった。多分心のどこかで元気なみんなをうらやましく思っていたからだと思う。心臓弁膜症。これのお陰でわたしは、小学生の時からまともに体育の授業を受けたことはなかった。

(音楽)(効果音) (回想のエコー)

まこと(7歳) お母さん、何でわたしは体育をしちゃいけないの？

母 あなたはね、心臓が弱いよ。だから、あんまり激しいスポーツをすると、すぐ苦しくなってしまうの。

まこと 大丈夫よ。だって、この間だって、悟君とサッカーしたけど、苦しくならなかったもん。

母 まこと、その時は苦しくならなかったかもしれないけど、帰ってきてハアハアしてたのはだれ？

まこと …

母 だから体育は、軽いもの以外しちゃいけません。分かったわね？  
(回想終わり)

ナレーション おてんばだったわたしは、動くことが好きなのに、こうして母に止められてしまい、いつも体育は半分ぐらいしかさせてもらえなかった。

まこと(モノローグ) 何でわたしばかりこんなに我慢しなきゃいけないんだろう。なぜ？

学校の先生 じゃあテストを返すぞ。今回の成績は非常に悪い。追試を受ける者がかなり多いぞ。自分の点数を見て追試だと思う者はあとで先生のところに来い。じゃあテストを返す。山本、田中、磯田、吉原…。

生徒たち (ガヤ)(口々に)よかったー。大丈夫だった。

浩司 やっべー、追試だよ。

健二 おれもだよ。信じらんねー。浩司の仲間なんてショックだ。

浩司 へっへっ、兄弟。共に追試を受けに行こうぜ。川村はどうだった？

まこと うん、よかった。

浩司 いいよなー。やらなくてもできるまことみたいなやつは、不公平だよな。

健二 うん、神様ってやつは不公平だよな。今度お寺に行ってお賽銭さいせん出して拜んでみようかな。いい点が取れますようにって。

浩司 ばっかだなあ。気休めだよ、そんなの。実力で勝負しなきゃ。

健二 実力があつて苦勞しねえよ。(3人笑う)

まこと(モノローグ) 不公平…。それはこっちが言いたい。みんなには健康な体がある。でもわたしには…。神様は不公平だ。

(効果音) (授業終了のチャイム)(生徒ガヤ)次は体育だ。

桃子 まこと、着替えに行こう。

まこと うん。

ナレーション わたしは気のない返事をしてから更衣室へと向かった。

まこと ねえ、もう着替えた？

桃子 もうちょっと。ねえ、まこと、先に行ってて。

まこと 全く桃子、遅いんだから。じゃあ先に行ってるよ。

(モノローグ) ほんとにもう早く行かなくちゃ、チャイム鳴っちゃう。あ、浩司と健二だ。

ナレーション 2人ともちょうど着替え終わったらしく、しゃべりながら歩いてきた。おどかさうと思ひ隠れていたわたしは、2人の会話を聞いてハッとした。

浩司 川村さ、本当に心臓悪いと思うか？

健二 前から思ってたんだけどさ、いくら心臓弱いからって気にしすぎだよな。今日のマラソンだって、出ないんだぜ、きっと。

浩司 ま、お嬢さんだから仕方ないんじゃないの？ おれたちにはこれから地獄が待っている、なんてな。

まこと(モノローグ) そんな…。浩司も健二もそんな風にわたしのこと思ってたの？

桃子 お待たせ、まこと。ちょ、ちょっと待ってよ。どうしたの？

ナレーション ショックだった。いつも心配してくれていると思っていたのに、違うと分かった今、自分がこんな体であることが憎らしくなった。

(モノローグ) わたしだって走れる。そうよ、走ってやる。

先生 はい、準備体操やめ。今からマラソンにする。コースは土手だ。分かるな。途中にはほかの先生がいるから、サボったらすぐ分かるぞ。では位置に就いて。

生徒 (口々に)かったりー。やだなー。

まこと 先生。

先生 何だ川村。お前はベンチに行っていていいぞ。

まこと そうじゃなくて、今日は走ります。

先生 大丈夫なのか？ 確か川村は心臓が悪いんじゃないか？

まこと 大丈夫です。走れます。

先生 そうか。じゃ苦しくなったら近くの先生に言うんだぞ。だれでもいいからな。

まこと はい。

ナレーション わたしは久しぶりに長い距離を走るの、ドキドキしていた。本当に走れるだろうか。すごく不安だったが、浩司と健二に、ベンチで弱弱しく据わっている姿を見られるより、走った方がマシだと思った。

桃子 まこと、走るの？ 大丈夫？

まこと 大丈夫。久しぶりに走れるからドキドキしちゃう。

桃子 気をつけて。無理しないでよ。

先生 では位置に就いて。よーい、スタート!

ナレーション みんなが一斉に走り出した。わたしも、なまっていた体を一生懸命動かした。思ったより走れそうだ。

桃子 (走りながら)まこと、大丈夫?

まこと うん、平気。先に行っていていいよ。

桃子 ううん、一緒に走るよ。

ナレーション だんだん息が上がってきた。心臓が、割れそうなくらい苦しい。目の前を見ると、浩司と健二がゆっくりと走っていた。後ろを振り返った2人は、わたしが走っているのを見て、びっくりした表情だった。

(効果音) (バックにまことの息切れの激しい息遣い。)

桃子 もう少しで半分だよ。

ナレーション その言葉を聞いた途端、わたしは、目の前が真っ白になった。

桃子 あっ、まこと、まこと!

(効果音) (救急車のサイレン)

ナレーション わたしは夢うつつの中で救急車のサイレンを聞いた。心臓の音だけが、まるで張り裂けるように頭の中で響いていた。

<後編>

ナレーション わたし、川村まこと。青春中学3年生。わたしは元気いっぱいの女の子、と言いたいところだけど、実は心臓病なの。友達はみんなわたしのことを心配してくれてると思ってたのに、本当は仮病だと思われてると知ったわたしは、意地になって、何年もやったことのないマラソンに出て、走っているうちに意識を失ってしまった。

(効果音) (救急車のサイレン)(意識を失っている間のまことの回想のエコー)

まこと(7歳) ねえ、お母さん。わたしも遊びたい。

母 今日寒いからやめとこうね。風邪引いちゃうでしょ。

まこと ねえ、お母さん。ドッジボールしてきていい? さっちゃんたちとするの。

母 いけません。帰ってきたとき、苦しくなったらどうするの。

健二 あいつ、今日のマラソン出ないんだぜ。

浩司 ま、お嬢さんだから仕方ないか。

まこと(モノローグ) やめて! どうしてみんなでわたしをいじめるの? わたしはみんなと遊びたいし、運動もしたい。ナレーションのに、なぜわたしはしてはいけないの!?

(効果音) (ラスト、多重エコー。回想終わり)

母 まこと、まこと。よかった、気がついたのね。

父 本当によかった。急に倒れたなんて聞いたもんだから、慌てて来てしまったよ。

母 そうよ。何で突然「走る」なんて言い出したの？

まこと 別に。

父 運動はあれほどダメだと言ったじゃないか。

まこと うるさいなあ。もうほっといてよ。

ナレーション みんな、わたしの気持ちなんて分からないという思いが収まり切れずわたしはどなっていしまった。父と母は心配そうに病室から出ていった。

まこと(モノローグ) あーあ、もうヤだ、こんな自分。

ナレーション ふと前を見ると、かわいらしい女の子がベッドに座って、じっとこっちを見ていた。

ルミ お姉ちゃん、今日からわたしと同じ部屋ね。わたし、星野ルミっていうの。よろしくね。

まこと あ、よろしく。

ナレーション そう言うと女の子は、すたすたと自分のベッドに入り、本を読み出した。その本を何気なく見ると、朝わたしが病院の前で拾った本だった。

まこと 「子供聖書物語」…。あ、じゃ今朝本落としたの、ルミちゃんだったんだ。

ルミ え？ あ、じゃあ本拾ってくれたの、お姉ちゃん？ どうもありがとう。

ナレーション 朝の出来事が、一瞬にしてよみがえってきた。

まこと(モノローグ) この子、クリスチャンなのかな。でも、何の病気で入院してんだろ。

ナレーション そのうちに、主治医の先生が来て、検査のため、4日ほど入院しなさいと言ってきた。どうせ浩司や健二にも会いたくないし、学校にも行く気がしなかったのので、すぐ入院の手続きをすると返事したのだった。夜になって病院が静まり返ってからも、わたしとルミちゃんはオシャベリしていた。

ルミ お姉ちゃんは、どうな病気なの？

まこと わたしはね、心臓病。生まれた時かららしいんだけど、分かったのはルミちゃんぐらいの時かな。

ルミ ふーん。じゃあ、わたしと同じだ。

まこと ルミちゃんはいつから入院してるの？

ルミ 2年前。小学校に入ってからすぐ。

ナレーション 淡々と話すルミちゃんの言葉を聞いてると、うじうじしている自分が恥ずかしくなった。翌日の朝。

ルミ おはよ、お姉ちゃん。

まこと あ、おはよ、ルミちゃん。

ルミ ねえ、お姉ちゃん。朝ご飯までまだ時間があるから、いいところ連れてってあげる。

ナレーション そう言うと、ルミちゃんはわたしの手を引っ張って、屋上へと連れていった。屋

上のドアを開けた途端、さあっと春の風がわたしたちを取り囲んだ。

ルミ お姉ちゃん、こっちこっち。

ナレーション ルミちゃんは、端のほうへと連れていった。そこには小さな花壇があって、中には名も知らない可憐な花がたくさん咲いていた。

まこと わあきれい! ルミちゃんが育てたの?

ルミ うん。毎朝起きたらすぐここに来るの。そしてお花に「おはよ」って言ってから、歌を歌ってあげるの。

まこと へえー。どんな歌?

ルミ 「主我を愛す、主は強ければ、我弱くとも...。」

まこと ふうん。その歌ってお母さんに習ったの?

ルミ うん。それと小さい時から教会で聞いてた。

まこと 教会って、あの十字架がてっぺんに付いてるの?

ルミ そう。わたしのパパね、教会の牧師なの。だから日曜日になるとみんなが教会に来て、歌を歌ったり、お祈りするの。そしてパパが神様のお話をするのを、小さい子からおじいちゃん、おばあちゃんまでみんな聞くんだ。

ナレーション ルミちゃんの目は輝いていた。わたしより体が悪くて、しかも学校にも行けないのに、なぜこの子は生き生きとしているんだろうと、わたしは不思議に思っていた。

(効果音) (ドアのノック音)

桃子 お邪魔しまーす。

まこと あ、桃子...。

浩司・健二 失礼しまーす。

まこと ...

桃子 心配だったから来ちゃった。いつまで入院するの?

まこと あさってまで。

浩司 昨日はいきなり走ってきたからびっくりしたぜ。

健二 本当、心配しちゃったよ。

まこと ウソつき。

浩司 & 健二 え?

まこと 昨日自分たちが言ったこと覚えてる? わたしを心配してるなんてウソ。どうせわたしはマラソンも走ることができないお嬢様ですよ。

浩司 い、いや、あれはそういう意味じゃなくて...。

健二 そうだよ、おれたち...。

まこと もう出てってよ。浩司と健二の顔なんか見たくない。お願い、帰って。

ナレーション わたしは激しくどなり、みんなを追い出した。そんなことしたくなかったのに... わたしはあまりの自分の醜さに涙が出てきてしまった。

まこと (しくしく泣く。)

ルミ お姉ちゃん、どうしたの？

ナレーション いつのまにかルミちゃんが検査から帰ってきていた。彼女は不思議そうにわたしの顔を眺めてから、ちょこんとわたしのベッドに座った。

まこと な、何でもないの。ちょっと悲しかっただけ。

ルミ お姉ちゃんに、この本見せてあげる。

ナレーション そう言うと、この前わたしが拾った本を差し出した。

まこと 十字架に架けられたこの男の人はだれ？

ルミ 神様の子供のイエス様。

まこと どうしてこの人が十字架につけられてるの？

ルミ あのね。みんなの罪のためなの。

まこと 罪って？

ルミ 人の物盗んだり、殺したりっていうのはもちろんそうだけど、ウソとか、意地悪しちゃうとか、人のことねたんだり、恨んだりするとか、そういう心の中の悪いこと。

まこと ふうん。

ナレーション わたしは内心、ドキッとしていた。自分のことを言われたような気がしたからだ。

ルミ それでね、イエス様は悪いことを全然しなかったのに、わたしたちのために十字架につけられて、死んでくださったの。でも3日目によみがえった。そのお陰でわたしたちは、イエス様を信じれば天国に行けるようになったんだ。イエス様がそんなことができたのは、わたしたちを愛してるからなの。そして、今もずっとわたしたちを見てくれる。

まこと ふうん。すごい話だね。でもわたしには、イエス様がわたしを愛してるなんて思えない。愛してるんならなぜわたしをみんなのような健康な体にししてくれなかったの？健康な人は何でもできて、わたしみたいな病気の人は色んなことを我慢しなくちゃいけない。そんなのって不公平すぎるよ。

ルミ お姉ちゃん…。

まこと だってそうでしょ。何かやろうとするとすぐダメだって言われて。だからって無理すれば病院行き。その腹いせに友達には当たっちゃうし、もう再低！こんな子、神様が愛してくれるわけじゃない。

ルミ わたしもね、始めはお姉ちゃんと同じように思ってたの。でも今は違う。わたしと同じようにお姉ちゃんのこと神様は好きだよ、絶対。

まこと どうして分かるの、そんなこと？

ルミ お姉ちゃん、心臓病だって言ったでしょ。だからいつ苦しくなっても、死んでもおかしくないでしょ。でも今までずっと生かされて、今日まで来られた。それは、お

姉ちゃんが死にたくないって思っているのを、神様がちゃんと聞いてくれるからだと思う。

まこと 生かされてる？ 神様に？

ルミ そう、神様ってね、この世界のものを全部つくったの。だからみんな神様に生かされてる。イエス様に愛されてるんだよ。

ナレーション ルミちゃんの言葉は、初めて聞くものばかりだった。でもその一つ一つには、なぜか分からないけど本当らしい響きがあった。

ルミ だからね、お姉ちゃんの気持ちは全部じゃないけど分かるんだ。わたしも友達と遊べないし、学校にも行けない。もうこのまま行けないかもしれないの。

まこと そんな。何でそんなこと言うの？

ルミ わたしね、再生不良性貧血っていう病気なの。ママが教えてくれた。だからもしかして、このまま死ぬのかなぁって。でも全然悲しくないの。

まこと ど、どうしてそう思えるの？

ルミ だって神様が一緒だもん。そして死んだら、イエス様のいる天国へ行けるんだもの。

まこと 天国かぁ。ルミちゃんてすごいんだね。

ルミ そうかな。お姉ちゃんも行けるんだよ、イエス様信じれば。

まこと 行けるといいな、わたしも。

ナレーション わたしは、心の底から信じて輝いていた、あの時のルミちゃんの顔を一生忘れない。次の日の朝、わたしは検査が終わったので退院することになった。ルミちゃんが出口のところまで見送りに来てくれた。

ルミ お姉ちゃん、元気を出してね。きっとよくなるように、イエス様にお祈りしてるから。それから、ルミのお願い、1つだけ聞いてくれる？

まこと あ、いいわよ。なあに？

ルミ あのね、今度の日曜日は、イエス様のよみがえりをお祝いするイースターなの。ルミは行けないから、その代わりだと思って、パパの教会の礼拝に出てくれる？

まこと う...うん。分かった。

ナレーション 次の日、わたしは数日ぶりに学校に行った。

健二 川村、もう退院できたんだ。

まこと うん。

浩司 (弱々しく)川村。

健二 ごめんな、この前のこと。すっごく反省してる。

まこと もういいの。気にしないで。

ナレーション 何のわだかまりもなくそう答えた自分が、我ながら不思議だった。これもルミちゃんのお陰かな。その週の金曜日の朝、わたしは学校へ行く前に、病院に寄っ



た。検査の結果を聞いて、ルミちゃんもお見舞いするつもりだった。

(効果音) (病室のドアをノックする音)

まこと こんにちは、ルミちゃんいる？

ナレーション だが、ルミちゃんのベッドはきれいに片付けられて、空だった。

主治医 あ、川村さん。

まこと あ、あの、ルミちゃんはどこか行ったんですか？

主治医 ルミちゃんは、ゆうべ亡くなったんだよ。

まこと え？

ナレーション わたしはガーンと頭を殴られたみたいに、一瞬何が何だか分からなくなった。

主治医 君にね、これをプレゼントしてくれて。何だか手紙も書いてたようだったが、そのあと、急に容体が悪くなってね。でも本当に安らかに、ほほえんで亡くなったよ。

ナレーション それは、あの「子供聖書物語」だった。わたしは、一人で屋上に上り、あの花壇のところでそっとその本を開いた。

(音楽) (バックに、「イースターの朝には」)

表紙の裏には、ルミちゃんが一生懸命書いてくれたユリの花のイースターカードが挟んであった。

まこと 大好きなお姉さん。イースター(ルミの声にオーバーラップ)おめでとうございませう。わたしの一番好きなイエス様の言葉を贈ります。

(イエスの声) わたしはよみがえりです。命です。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。(ヨハネ 11:25)

ナレーション 目をやると、るみちゃんが心を込めて育てた小さな花々に、ゆうべのうちに降りた夜露が、朝の光を受けてキラキラと輝いていた。わたしは、かすかな花の香りを含んだ朝の空気を胸一杯に吸い込んだ。それは、命の朝の息吹だった。

まこと(モノローグ) ルミちゃん。わたしも、生かされてるんだ、きっと。イエス様の天国で、会おうね。

ナレーション わたしは、心の中でそうつぶやいたのだった。

(完)